



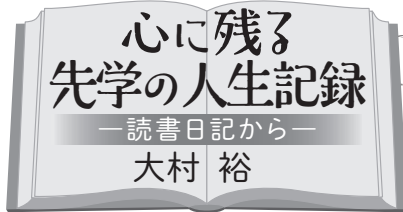
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.219  
2021.12.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第25回

サリー・グリーン著 近藤義郎/山口晋子訳  
『考古学の変革者—ゴードン・チャイルドの生涯』  
(岩波書店 1987年)

ゴードン・チャイルド(1892~1957年)は、日本の考古学者にも多大な影響を与えている世界的に著名な考古学者である。本書を繙いた限りでも、山内清男の考古学を彷彿とさせる記述を多数見出すことが出来る。とりわけ、「正しく設定された時期区分の網目の中に文字記録を利用できる地域が含まれていれば、関連する時期については絶対年代を限定できる」という方針は、晩年の山内清男による矢柄研磨器の研究の方法そのものである。「インド・ヨーロッパ語族の『原初の文化』を確認し、その故地を特定する問題」意識も山内のそれ(「日本民族」の故地の究明)と通じ合うものがある。詳細を紹介出来ないのが残念である。それはさておき、彼は1957年10月19日、故郷オーストラリアのブライダル・バール滝付近の絶壁から身を投げ、65歳の生涯を自ら閉じている。その死から23年後、W・F・グライムズ宛の手紙の内容が公表され、チャイルドの心の奥底にあった真意が明らかになったのである。その書簡の内容を要約すれば以下の通りである。

- ①「年長者が働いているかぎり、若く有能な研究者が前進する道を塞ぐことになる。」
- ②「65歳を超えれば、ほとんどすべての人が後輩より肉体的に衰え、精神的にも頭の回転や適応力がはるかに低下する」「新しい発想が生みだせるかどうかは疑わしい。」
- ③著名な教授は、「退職後もその威信は大きく、進歩的発想の拡大を妨げ、かつて10年、15年前には独創的で効果的だった理論や方法に果敢に挑戦する革新者の前途をふみにじる力を持っている。」
- ④「老人の論文は古い同じ論旨のくりかえしが通例で、それとて前よりの確な表現に改善されているとはかぎらない。」
- ⑤「私は常々、分別ある社会なら、これらの寄生集団を(中略)この上ない名譽として安楽死を提供するか、仕方ない場合はそれを強制することによって重荷を免れるだろうと考えてきた。」
- ⑥「私自身に関して、自分が今後さらに先史学に貢献できるとは思わない。」
- ⑦「これまでも健康に恵まれていると感じたことはなかったが、馬鹿らしいほど容易にひどい病気になってしまう。(中略)そうなれば社会の重荷にすぎない。(中略)それが現実とならないうちに生を終えたいと常々考えてきた。(中略)幸福で体力のあるうちに生を終えるのが一番よい。」

親しい友人宛の私的書簡で、没後20数年後の公表だから、辛うじて激しい世間の非難を免れたのかもしれない。それにしても大変な問題発言というべきである。ちなみに私はチャイルドの没年齢より多少歳をとっているが、同意できる部分と反発する部分がある。ここでは、なぜチャイルドがこうした絶望感に落ち込んでしまったのかを考えてみたい。

チャイルドは1892年4月14日、オーストラリアのシドニーにおいて

誕生。父は北シドニーの聖トマス教会の教区司祭で、他人への思いやりが欠如する厳格な男であった。チャイルドの無神論的・合理主義的思想は、この厳格な父のしつけに由来(反発)すると思われる。

1911年、シドニー大学に入学し、初年度には古典学・哲学および幾何学・代数学・三角法・地質学を学んでいる。1914年には、ラテン語・古代ギリシア語・哲学を第1級優等で卒業した上、古典学で「大学賞牌」を、哲学論文では「フランシス・アングラスン教授賞」を授与されたというから大変な秀才であったといえよう。

1914年10月には、イギリスのオックスフォードのクイーンズ・カレッジに進学し、古典考古学を学んでいるが、野外調査は「実質的に独学」であったようである。そういえば本書には、チャイルドは「測量術をまったく知らない」、「写真の撮り方に至っては嘆かわしいばかりで、発掘法は無いに等しかった」と言う散々な証言が紹介されている。

帰国後、グラマー・スクールのラテン語教師となるが、「その講義は教室中にみなぎる混乱にかき消され(中略)、ついにある日、クラス全員が先生めがけて一斉に豆鉄砲を飛ばした」というような状態になった。今流でいえば「学級崩壊」であろう。それはそうである。後年、大学の教員になっても、発音は不明瞭、しかも内容が高度な上に、話の筋に必要なところは飛ばしてしまうので、「授業についてゆくために、学生の心はいつも蛙飛びをしていた」という。問題児が多かった中等学校という点を割り引いても、このような教え方であったならば、学級崩壊になるのも無理からぬところである。彼はやがてここを離れ、シドニー大学のチューターになろうとするが、思想上の問題(良心的兵役拒否者でマルクス主義者)から大学理事会によって任命を拒否されてしまう。その後紆余曲折を経て、1927年、ようやくエジンバラ大学の「アバクロンビ考古学講座」初代教授となったのであった(後、ロンドン大学考古学研究所長兼先史ヨーロッパ考古学教授に就任)。しかし行政能力が欠如し、人間関係を取り結ぶことが不得手で、晩年には「人間関係は常にわずらわしく」、「人づき合いは非常に精力を消耗する」と友人に語っていたという。このことが大学人として孤立する要因となったのであろう。折しもスターリン死後、彼の側近のフルシチョフによるスターリン批判が行なわれ(1956年)、徐々にスターリンの非道が明らかになって行く。あまつさえハンガリーで反ソ運動が激しく燃え盛ると、ソ連軍はハンガリーに侵攻して「暴動」を鎮圧してしまう。これを契機に多くの党員が共産党から離れていったというが、「ソヴィエト・ロシアに盲従しているという印象」を人に与えていたチャイルドには、その衝撃は相当なものであったろう。

学者としての年齢的限界・自らの学説の動揺(炭素14年代測定法の普及による欧州編年の瓦解の予感)・孤独な私生活・信奉していたソ連への失望、そうした多くの要因が相まってチャイルドの悲劇が生まれたのではないかと想像するのである。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

## 目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第25回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第212回) 福沢佳典 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました (最終回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「いま学ぶ アイヌ民族の歴史」 佐藤 剛 …4

## 考古学の履歴書

## カナダで米寿をむかえました(最終回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

## 22.1. 関西学院大学客員教授

准副学長の任期を修了した翌年度は関西学院大学の客員教授として1997年8月末まで日本に滞在した。客員教授としての職務は学部で「人類学基礎演習」と「理論社会学特論」の2科目、大学院で「社会学理論特殊講義」という科目を受け持つこと。一年生を対象とした「人類学基礎演習」では総合人類学の見地から現生人類の発生と拡散、カナダの原住民の起源と現状、縄文人との関係、「日本文化」の形成過程などについて日本語で講義した。3、4年生を対象とした「理論社会学特論」と大学院の「社会学理論特殊講義」は一コマに合併して、英語で講義してくださいとのことだったので、日本文化論、単一民族論などについてカナダで出版された論文集をテキストにして、国外での日本研究にも言及した。このほかに、外国から来ている交換留学生を対象に、これも英語で、日本文化の形成、考古学が現在の日本社会に占める役割などについて講義したが、いずれも毎週一コマ90分の授業なので、授業の合間に遺跡見学、聞き取り調査などに日本各地を回ることができた。四月末にカナダの冬学期の講義がかわると、夫フィリップがたずねてきて、各地で講演をしたり、一緒に遺跡巡りをしたりした。

## 22.2. 旧石器遺跡捏造の発覚と検証

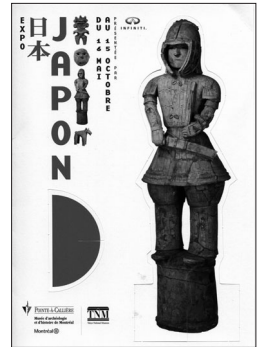
1997年の春、フィリップと一緒に仙台の芹沢長介先生をおたずねした際、近辺の遺跡を見学する手配をしてくださった。捏造事件発覚の糸口になった上高森もその時案内して頂いた遺跡のひとつ。95年の第3次発掘で埋納遺構が出土したB地点の地層は、近くの崖面に明瞭に見える層位と対比すると、テフラ年代57万年前の地層に相当するとのこと説明を聞いて「B地点ではこの上部の地層には何があったのですか」とお尋ねしたところ、このあたりの土は数十年前に取り払われていたという御返事に、フィリップと私は思わず顔をみあわせた。口に出さなかったが「それではこの地層面は何十年間も差し込み可能な開放状態だったわけですね」という意味の表情を取り交わしたのを、ご案内いただいた方たちが読み取られたのはあきらかだった。

2000年11月の毎日新聞社のスクープにはじまる前・中期旧石器遺跡捏造の発覚と検証の経緯、結果については専門家・一般人向けの出版物が国内で氾濫していたが、国外での関心の高さを実感したのは2002年3月にデンバーで開催されたアメリカ考古学協会の年次大会だった。この協会の年次大会には毎年数千人が参加して、多数の同時セッションに分かれて研究発表・討論がおこなわれる。2002年大会のプログラムによると、当時カリフォルニア大学サンタバーバラ校にいられた故裴炯逸(Hyung Il Pai)博士と天理大学のウォルター・エドワーズ教授が共同で企画された『日本考古学の過去と現在を探究する』と題するセッションで私が「一体どういうことが起こったのか?日本の前期旧石器捏造事件の検証」という発表をすることになっていた。私の順番が回ってきて演壇に立って驚いたのは、100名くらい入るセッション会場が立席しかない満員状態、そして私の発表が終わると、聴衆の大半が他の会場にむけて出て行かれたことだった。日本の旧石器事件のことだけを聞きに来られたということらしかった。

“その後どうなったか?”ということをお報告する意図で、2014年6月にモンゴリアのウランバートルで開かれた東亜考古学協会(Society for East Asian Archaeology)で『日本の前期旧石器研究の再出発』(Starting Over Again: the Early Palaeolithic Research in Japan Today)と題するセッションを東大の佐藤宏之教授と共同で企画し、金取、竹佐中原、砂原、草水台、大野、入口などの遺跡の調査者に現状を報告していただいた。それら研究報告の一部は協会のウェブサイト掲載のブルティンに掲載している[Bulletin of the Society for East Asian Archaeology (BSEAA), Vol. 3, on SEAA-web (<http://www.seaa-web.org/bul-cont2016.htm>)]

## 22.3. マギル大学名誉教授

この時点では私はすでにマギル大学から引退して名誉教授の称号をいただいていた。2003年末で引退した後も、東アジアの大学との交換協定や夏期研修に関する交渉などには関与しており、カナダの日本研究学会の会長(2004-2007)と上記の東亜考古学協会という国際学会の会長(2004-2012)を同時に務めるなど結構忙しかついていた。そのほか各種の選考委員会、評価委員会、諮問委員会など頼まれるままに引き受けて引退前よりも忙しかったようだった。そのうちでもやりがいがあったのはモントリオールの考古・歴史博物館が東京国立博物館と提携して日本考古学の展示会をした際、アドバイザーとしてお手伝いしたことだった。展示会は2006年の5月16日から10月15日までの5ヶ月間、国立博物館を経て借用した展示品は、国宝の埴輪一点、火炎土器や銅鏡、船形埴輪など重要文化財16点を含んだ総数150点。展示品の説明書は、単なるカタログではなく、展示品の文化史的背景などを一般人向けに説明した解説書を英・仏両語で準備しようというのが博物館の意図で、私の役目はその内容の正確さを確認することだった。結果としてなかなか立派な本が出版できたと思っている。



モントリオールで開催された日本考古学展の案内状

忙しいなかでも中国、韓国、沿海州の各地、たまにはヨーロッパの都市で催された各種の国際学会には毎年のように出席していたが、2018年9月にベトナムの古都、フエ市で開催されたインド・太平洋先史学会の年次大会には特別の目的があって参加した。この年は私の旧師、ハラム・モヴィウス博士が、モヴィウスライン説を発表してから70年目にあたるので、「70年後のモヴィウスライン」(The Movius Line 70 years later)というセッションを計画して、各国の研究者に連絡したところ多数の参加希望者があって、8:30AMから5:00PMまで終日のセッションとなった。1978年に握斧が発見された朝鮮半島に関する数点の論考からはじまって、中国各地で発掘されている斧型石器に関する考察、そして日本列島、東南アジアの島嶼をへて、最後にエクセター大学のロビン・デネル(Robin Dennell)博士の「モヴィウスラインは70年でもう沢山だ」(Movius Line - 70 years is enough)という御意見を発端とする一般討論で終了した。ResearchGateなどのウェブ統計によると、出版された拙文のうちで一番多く読まれているのはEncyclopedia of Global Archaeology(Springer 2014)所載の「Movius Line」という短文だというのは、モヴィウスラインに関する意見は様々ながら、関心はいまだに高いということだろう。モヴィウス博士指導の特殊購読(第2回、アルカ通信No.179)で始まった私の旧石器研究のキャリアも、モヴィウスラインと同様、「70年でもう沢山だ」という時点がちかくなってきたという感慨で、私の『履歴書』を終結させていただくことにする。

略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在：神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現：奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学卒
1953-54年	東京都立大学【現：首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会学研究科(社会学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ラドクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部【現在ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)
1974年	ハーヴァード大学人類学科に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人類学人類学科 非常勤講師
1967-69年	マギル大学人類学人類学科 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人類学人類学科 専任教員；2009年以来名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

井川先生、カナダからの貴重な御連載本当にありがとうございました。  
次は山本暉久先生の御連載が始まります。お楽しみに! 編集部

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

## リレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 212

## 内山遺跡 ～宮城県牡鹿郡女川町

福沢 佳典

今回私が紹介するのは宮城県女川町の内山遺跡です。平成26年度に実施された東日本大震災からの復興に伴う発掘調査に派遣職員として携わりました。1年という限られた派遣期間でしたが、震災からの復興に微力ながらも関わることができ、非常に思い出に残る遺跡です。

女川町は宮城県東の牡鹿半島基部に位置し、北上山地と太平洋が作り出す美しいリアス式海岸の景観とともに、女川港は古くから天然の良港として知られていました。

内山遺跡は、女川湾の西奥に向かって南北方向にのびる丘陵に立地し、古くから縄文時代前期～晩期の土器や石器が多く採集されていました。内山遺跡の周辺にも、女川湾に面する丘陵に縄文時代の遺跡が立地しています。

発掘調査は、震災により被害を受けた女川町が実施した土地区画整理事業・高台移転に伴い実施されました。

約4,500㎡の調査面積で、平成26年4月14日～7月25日まで調査を行いました。調査員体制は女川町職員2名(私と宮城県から派遣職員)、宮城県からの協力職員3名(うち2名は香川県、兵庫県から派遣職員)でした。

調査地は近現代の開発で段状に造成されており、盛土は厚い箇所では2m近くありました。削平は広範囲で岩盤にまで深く達し、旧表土や包含層は一部にだけ残っていました。

旧地形が残存していた部分を中心に、縄文時代中期～後期前葉の竪穴住居跡、炉跡(土器埋設炉含む)、掘立柱建物、貯蔵穴、近世墓が見つかりました。出土遺物はテンバコ79箱に及び、主に縄文土器(中期後葉～後期前葉)、石器が出土したほか、近世の墓には陶磁器(相馬焼ほか)、煙管、古銭(寛永通宝ほか)が埋納されていました。上述のように、遺構の上面は削平されており、竪穴住居跡に付属する炉跡も遺構検出面で見つかり、住居の掘り込み等は確認できませんでした。貯蔵穴も最も深いもので約130cm程度の残存でしたが、2カ所に集中していました。炉跡の分布と併せて考えると、狭い尾根上に細長く立地する集落を想定できますが、削平により破壊されてしまった部分も多いと考えられます。

この調査では女川湾を望む丘陵上に営まれた縄文時代中期～後期前葉のムラの一部が発見され、町内ではこの時期の集落遺跡の調査は初めてで、当時の人びとの生活の様子を知る上で貴重な資料となりました。江戸時代には一部が墓地として利用



▲内山遺跡調査区全景(参考文献より転載)

されていましたが、海とともに生活をしてきた人々が海を見下ろす高台に墓地を形成していたことは、内陸出身の私にはとても新鮮なことでした。

内山遺跡の調査は、女川町教育委員会へ派遣されわずか2週間後に始まり、職場に慣れないうちに発掘機材の調達、発掘作業員の確保を始めなければなりません。当時は日々の業務をこなすことに精一杯で、もっとできることがあったと今でも後悔がありますが、他の派遣職員からも女川町の人々からも多くのことを学んだ調査経験となりました。

女川町教育委員会主体で実施する初めての本格的な発掘調査で、現地説明会にも多くの町民に参加していただき、自分たちの町にも遺跡があり、古くからの歴史があると感じてもらおう機会となりました。また、小中学生の発掘体験や現場見学会も含めて、複数回の現場公開の機会を設けることができました。女川中学校の総合学習でも埋蔵文化財がテーマに取り入れられ、これからの女川町を支えていく子どもたちが、大人になっても町の文化財への興味や誇りを持ち続ける第一歩となると、非常にうれしく思いました。



▲中学生の発掘体験

発掘作業に参加してくれた町民の方々は、発掘調査の経験もなく、発掘調査の見学もしたこともなかった方がほとんどでした。当初は今まで町の遺跡を知らなかったとか、発掘調査は土器を採集するだけだと思っていたという声も聞かれました。女川町の発掘調査が終わった後も他所の発掘調査に参加する方もいて、遺跡への興味・意識が高まっていったことを実感できました。

当時、町には専門職員がいなかったため、派遣職員により発掘調査が実施されましたが、町職員の多くの協力がなければ調査は実施できませんでした。また、町民文化祭に合わせた発掘調査成果展示、小中学生の体験学習などの普及公開の機会を設けることができたのも、女川町職員の熱心な支えがあったからこそです。復興に伴う発掘調査がひと段落した今は調査の機会は減っていると思いますが、発掘調査出土品を適切に保管し、町の誇りとして、また、復興への道のりを示す一つとして引き続き活用していただきたいと思います。

## 参考文献:

- 女川町教育委員会 2017 『女川町文化財調査報告書6 内山遺跡』
- 女川町教育委員会 2014 『女川町内山遺跡発掘調査現地説明会説明資料』

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは原田健司さんです。

## 考古学者の書棚

## 「いま学ぶ アイヌ民族の歴史」

加藤博文・若園雄志郎 編／山川出版社(2018)

佐藤 剛

## はじめに

私はyaunmosir(ヤウンモシリ・北海道)島と周辺諸島の先住民族であるアイヌ民族について語る際には、和人の考古学研究者を表明しており(佐藤2020など)、その立場から本書の内容をご紹介します。自由な書き方でとのことなので、私の現在の関心に引き寄せて感想を述べたい。私はyaunmosir島在住、中学2年生の子がいる。宮城出身、高校で選択した日本史は苦手、赤点も常だった。最近は現代的な課題として、この広大な島の子達を含む人々がこれからの日本とこの島で、どのようにして先住民族であるアイヌ民族と本州列島に由来する和民族の「共生」を果たしていくのかにとっても関心がある。

周知のことだが、編者の一人であり、第1部の先史・古代併行期を執筆する加藤博文氏は、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの考古学者で、近年は「先住民考古学」を提唱する。また、第2部の中世併行期の執筆者は、中世史と考古学に携わる函館高等専門学校教授の中村和之氏である。

## 本書の概要

## まえがき

- 第1部 アイヌ形成に至る歴史
- 第2部 北海道島におけるアイヌの形成
- 第3部 近世国家とアイヌ
- 第4部 近代国家の成立とアイヌ民族支配
- 第5部 大正・昭和初期の日本とアイヌ民族
- 第6部 戦後民主国家の成立とアイヌ民族
- 付録など

全155頁で、各部は20頁程度にバランス良く構成する。内容は通史のため詳述できないが、現代的視点からアイヌ民族の歴史について、背景の詳細を全体の流れとして、手軽にだが確実に知ることができる。

「まえがき」には本書の編集方針と構成が示してあるため、代わりに紹介したい。現在のアイヌ民族についての政策的、社会的な状況が示され、2007年以降の日本における先住民族としてのアイヌ民族の承認と、国民的な関心の高さが述べられる。

「北海道の歴史と先住民族アイヌの歴史」は近世以前の北海道島の歴史をアイヌの民族形成の歴史とする。日本史の概説書の語りは、「いかにして日本という国家が日本列島のなかで成立してきたのかであり、日本という国家の領域内で生じた歴史的出来事、そこに暮らした人々を主軸に解説」していることを示し、アイヌの歴史が日本史の枠組みの外側で独自に展開してきたことを強調する。学校教育での歴史は、日本史と世界史(外国史)に二分され、日本史が一国史を語っていることを指摘し、その語りが「国家の歴史」、「国民の物語」という枠組みに陥りやすかったとする日本学術会議の報告を紹介する。近年の日本史研究は、国民国家史的・一国史的な日本史像の打破をはかる取り組みがなされ、歴史を学ぶ上での重要性は「誰のための歴史なのか」「誰に対して歴史を語るのか」との基本的な問いかけを続けることとする。歴史の語りは一つではなく、歴史には自者と複数の他者が存在し、歴史の解釈に求められるのは、解釈の多様性であるとする。

「本書の構成」では、問題はあるが、高校での日本史の枠組みを基礎において、古代・中世・近世・近代・現代の時代ごとに北海道島と先住民族であるアイヌの歴史をまとめる。無理としつつ、この時代区分に沿うのは、多くの人が学校教育で学ぶ歴史は、高校までこの枠組みで学ぶためと理由を述べる。本書は教科書のすべての時代でアイヌの歴史がたどれることを示す。本来は時代区分においてもアイヌ独自の歴史観が反映される必要があり、その意味で本書はまだ未完成とする。最後に、将来的に日本史の時代区分とは別のアイヌ民族自らの視点に立った、アイヌ民族自身の語りを組み込んだ独自の歴史が提示できるようになることが理想とする。

## 若干の感想

少し批判的にみると、日本学術会議は日本歴史に人類史や世界から見た視点を取り入れると述べるが、それだけでは解決には至らないと思われた。現代的に両者を区別しすぎることは避けたいが、主に人類学の目指す人類としての共通性ととも、主に歴史学の検討してきた地域性の議論は両輪である。歴史叙述の仕方そのものを個別に検討する必要がある。

また、アイヌ民族の歴史と考えると、各部のタイトルなどは、国家形成史・政治史とそれに対するアイヌ民族という構図での歴史の描き方とも捉えられるところがある。関係性は重大で、国家とその政策がアイヌ民族に大きな影響と過大な負担を強いてきたことを十分に物語る。しかし、教科書に沿うためだが、アイヌ民族の主体性からの歴史としたときに、私には少しだけ違和感があった。アイヌ民族と等置して語るべきは日本なのだろうか。私は、日本列島におけるyaunmosir島の先住民族であるアイヌ民族と南西諸島の先住民族である琉球民族に等置するのは、本州列島に由来する和民族と考える。主体者の歴史と捉えたときに、本州列島で起きた歴史事象は主に和民族が担ったのであり、それは、日本・日本人を主体として語る違和感(語られない、多数者として透明な和人・和民族)である。「まえがき」で目指す一国史から離れた歴史とはどのようなものなのか。私自身も、今後も模索していきたい。

些末な感想を述べたが、良書であり、若い方々や筆者のような歴史が得意ではない方にも通史としての流れが理解しやすいと思う。編集・著者などのご尽力とともに、学校教育での歴史の枠組みから記載・叙述されるためだろう。どのような枠組みを用いるかは今後も検討していく必要があるが、歴史叙述としての枠組みは重要な点を再認識させていただいた。

ぜひ、皆さんやお子さんなど多くの方に手に取っていただき、アイヌ民族と和民族の歴史とその現代性をともに考え、試みと対話を続けていきたい。

## 引用・参考文献:

- 加藤博文 2020 「アイヌ民族と先住民考古学」『世界と日本の考古学 -オリーブの林と赤い大地-』常木見先生退職記念論文編集委員会編 六一書房
- 佐藤 剛 2020 「接触・緩衝地帯(フロンティア)(西川2019)について」『弥生時代の東西交流～広域的な連携を考える～』考古学リーダー27 西相模考古学研究会・兵庫考古学談話会編 六一書房
- 佐藤 剛 2021 「ユベオツ(統魂文)時代の概説」『第41回 南北道考古学情報交換会講演資料』南北道考古学情報交換会編
- (<https://ishijunpei.github.io/dkouko2020/>)

## アルカ通信 No.219

発行日 2021年12月1日  
 企画 角張淳一(故人)  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801  
 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp  
 URL : <http://www.aruka.co.jp>